

「同じ思い」

七里教会 2022年6月19日

フィリピの信徒への手紙2：1-11

佐々木 佐余子

この2章の出だしを読むと、「そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐みの心があるなら」とありますが、ここを深読みすると、何らかのいざこざがフィリピのクリスチャンたちに起こったのではないかと、思われるのです。そして2節に「同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください」とパウロは願っています。もし何かあったとしたら、いざこざがどのようなことなのか、皆目見当がつきませんが、当事者同士ならわかるのでしょう。フィリピ書をずっと読むと、4章に2人の婦人たちが出てきます。4章の2節です。「わたしはエボディアに勧め、またシンティケに勧めます。主において同じ思いを抱きなさい」とありますが、どうも、教会婦人たちが仲たがいをしているようなのです。この2人は命の書に記されているほど、懸命に伝道のため働いてくれた人なのでした。それが、どういうことかは不明ですが、意見が合わず関係がぎくしゃくしている。こういう状態はよくあることです。一生懸命すればするほど、我がむき出しになって相入れない。パウロは、2人に和解を勧め、また周囲の者たちにも、その協力を求めます。しかし、これがなかなかうまくいかない場合もあります。でも時間がたって、お互い冷静になり、元々2人は信仰があるのですから、心がわかりあって仲直りする場合もあります。教会内の不和は、単なる道徳的な欠点や短所の面だけではなく、教会の伝道にとって、大事な重要な根本的なつまづきなのです。口ばかりいいこと言って相互の愛の実践がないなら虚しいのです。3節4節に「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい」と教えました。

パウロは信仰の原点を思い出させました。6節から8節は教会の信仰告白文が書かれています。ここは有名な告白文です。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」とあります。この信仰告白文は初代教会で既に用いられていた讚美歌の一つではないかと言われています。主イエス・キリストの謙虚な姿を、キリスト者が仰ぐべき姿として示し、お互い赦しあうことの大切さを教えたのです。

ところで、パウロは獄中の身でありながら、どのようにして遠いフィリピ教会の問題・状況を知ったのでしょうか。誰か教える人がいたのでしょうか？ パウロには忠実な友がいました。それは2章の25節に詳しく書かれています。長いので要約しますが、エパフロディトはマケドニアのフィリピ出身のクリスチャンでした。フィリピの教会から贈り物をもつ

て、獄中のパウロを訪問し、パウロに仕えた人です。ところが、このエパフロディト2章の27節にあります、ひん死の重病にかかってしまったのです。幸い、回復したのですが、彼はフィリピの人たちと会いたがっており、それを知ってパウロはフィリピの信徒への手紙を持たせてフィリピに送り返したのです。25節を読むと、「ところでわたしは、エパフロディトをそちらに返さねばならないと考えています。彼はわたしの兄弟、協力者、戦友であり、また、あなたがたの使者として、わたしの窮乏のとき奉仕者となってくれましたが、」とあります。パウロは伝道するとき、常に周りに助け支える人がいたのです。

パウロはどこで捕らえられたのでしょうか。2つの説があり、1つはエフェソで捕らえられた。もう1つはローマで捕らえられた説です。けれど、ローマは余りにも遠すぎるのではないのでしょうか。フィリピからローマに病み上がりのエパフロディトが行けるのでしょうか。ローマから約800キロ離れているのです。けれどフィリピならその半分ですから。ですからエフェソで入獄したと考えるのが自然です。また、パウロはエフェソで野獣と戦ったという表現をしています。その頃は奴隷が見世物のためにライオンや牛と戦ってそれを観客が面白がって見物していたようですが、まさか、パウロが野獣と戦ったわけではあるまいし、たとえで表現しているのではないかと思いますが、パウロ行伝という外典があり、それを読むとパウロはエフェソで捕らえられた時、実際、ライオンがパウロに向けて放されたことがあったのです。ところが、獣は競技場にいるパウロの所に走って行ったけれど、彼の足元にうづくまり、パウロには触れなかったということです。その後、激しく大量の雹が降って来て、野獣の頭を打ち砕きパウロの命は助かったと言うのです。そして、もう1つ、外典にはこのようなこともあったようです。パウロが牢獄に入れられた時、2人の貴婦人が夜来て、彼から洗礼を受けた話です。洗礼は水がないと受けられないので、その貴婦人とパウロが海辺に出て洗礼を授けたという話です。外典にはそのような話もありました。

教会用語なのですが、「羊が羊を産む」と言われています。羊飼いが羊を育てるのですが、大きくなった羊は子供を産みます。ですから、羊が羊を産むのはあたりまえなのですが、羊飼いが羊を産むのではないのです。何を言いたいのかと言いますと、信徒伝道が大切なのだと言っているのです。パウロを羊飼いと例えると、パウロは羊に草を食べさせ水を飲ませて飼います。その羊は栄養を与えられて、子供を産むのです。そのように牧師は信徒に福音という栄養を与えて育て、その羊が立派になるとその羊を見て他の羊が懐いてそばに寄って来て、一緒に草を食べ水を飲み育つのです。その羊が子供を産んで増えます。だから羊が羊を産むのです。教会に新しい人が入ってくると、まず周りの信徒を見るのではないのでしょうか。「この人素晴らしいわ」と内心思うとその人のそばに来て草を食べ水を飲むのです。自分と感性が合わないと、その人のそばにはいかないのです。そのようにして教会は増えていくのかもしれませんが、「羊が羊を産む」のです。パウロがあちらこちらで人を集めたのも、パウロの友、協力者、奉仕者を見て、少しずつ輪が広がったのではないのでしょうか。

9節にこうあります。「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお

与えになりました。」初代教会はナザレのイエスに主イエス・キリストという名を与えました。主はキュリオス救い主という意味です。旧約聖書では神の名はヤーウエと呼ばれています。この名前ヤーウエが、復活されたイエスに与えられました。この名ヤーウエは、イエスが復活され昇天された出来事によって、イエスが主であり、神であることを表しています。これは教会の秘儀なのです。誰も聖霊に拠らなければ告白することはできません。厳粛な気持ちになりますね。教会に連なるわたしたち、パウロが 15 節で言っているように、「そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかりと保つでしょう」とすすめています。パウロの住んでいた時代は、まさによこしまな曲がった時代なのでした。その頃のユダ地方はローマの属州でした。歴史を紐解くと 1～2 世紀ごろ、イタリア辺りは東のゲルマン人、この民族は蛮族と呼ばれ、その名の通り野蛮な民族だったらしいですが、彼らがイタリアに進出し住むようになりました。体の特徴は長身であり、青い目をしていて、ブロンドの髪、金髪と高い鼻をしていたようです。いわゆる白人系ですね。けれど、その行いは野蛮であったのです。盗みをしたり、人心にもとった行い、それは人の心に反する行いをしていたのです。ですから、パウロは、よこしまな曲がったこの時代としているのです。しかし、4 世紀ごろ、彼らがキリスト教徒になると、教会はキリスト教の礼儀・作法を教えジェントルマンやレディとして紳士・淑女としてのしつけをし、養育しました。そしてヨーロッパ文化の花が開いていくのです。ですから教会無くして、今のヨーロッパ文化はないのです。芸術、絵画や建築、音楽等素晴らしいですね。

2 章をずっと読んでいくと、あれっと思うか所にぶつかります。2 章の 21 節に「他の人は皆、イエス・キリストのことではなく、自分のことを追い求めています」というところです。前を読むと「テモテのようにわたしと同じ思いを抱いて、親身になってあなたがたのことを心にかけている者は他にいないのです」とあります。これはどのように解釈したらいいのでしょうか。テモテは、パウロが最初にフィリピの町を訪れた際、同行した人であり、テモテはフィリピ教会に特別な感情を持っていたと思うのです。それでテモテのように、親身になってフィリピ教会のことを心配してくれる人はいない、と言ったのです。それに対してエフェソの教会の人たちは、遠くにあるフィリピの教会の人たちのことはあまり気にかけておらず、よそ事のように思っていた節があるのではないのでしょうか。それで、ついパウロが本音を出してしまった様なのですが、パウロの人間臭さが表れていて読んでいて救われますね。「あーパウロもこういう気持ちになる時もあるのだ」と思って親近感を感じます。あまり立派すぎるとへこんでしまって。そういう気持ちって皆、あると思います。ここでいうところの他の人とは、エフェソの教会の人々ではないのでしょうか。パウロは、テモテを「信仰によるわたしの真実な子」と呼んでいます。テモテの父親はギリシャ人、母はクリスチャンに改宗したユダヤ人、祖母も敬虔な人で、彼は幼いころから信仰的な環境の下で成長した、いわゆる模範生だったのです。パウロに見込まれて第 2 回目と第 3 回目の伝道旅行に加わ

りました。パウロの手紙にも差出人にテモテの名がよくありますね。パウロと同じ心で伝道したのです。後の伝承によれば、65年にパウロから按手を受け、エフェソの主教に任じられたとされています。テモテは、15年間エフェソの教会を指導したのですが、エフェソの地であって、他の宗教の人々から棄教を迫られたけれど従わず、反って主の福音を説いたため、石打の刑になり殉教したとされています。どこまでも師と「同じ心」で天に昇ったのです。

わたしたちもパウロと全く同じ心で、とは言えないけれど、少しは近づくようにされて、これからも歩みたいと思います。